

ジェンダー——久永草太

心の花宮崎歌会の詠草から一首、許可を得て引用したい。
・安心とは温もりである抱けば寝て置けば泣く吾子まだ腕の中

心の花宮崎十一月歌会より 柴田麻衣

「安心とは温もりである、という言いきり方が良いですね。腕の中の赤子は温もって安心していることでしようし、また逆に腕の中の子どもの温もりにこの母自身も安心して……」

無記名のこの歌にこのように言いかけて、あつ、と気がつき、

「いや、父かもですね。どっちはわからないですが……」

と言い直す。勝手に赤子をあやす「女性」を想像してしまっていた。まるでオムツのテレビコマーシャルのように。こういった性別役割分業的な意識は持っていないと自負していただけに、たとえ実際に女性の歌であったとしても恥ずかしい。反省の意味も込めて、ジェンダーの話を中心に二〇二二年を振り返ろうと思う。

・花を踏む 咎める人の足元はコンクリートで幸せですね

ショージサキ「Lighthouse」

・くらがりを避けずにひとり歩けたらそれがわたしの最初の至福
小松岬「しぶくの時」

二〇二二年の短歌研究新人賞の受賞作、候補作からの引用である。この選考会の短評のなかで、選者のひとりが「女性の生きづらさ」をテーマにした応募作が多かったことについて「短歌の世

界では追い風が吹いていて、むしろ安牌」だからこそ、ちよっと考えてほしい、と述べ、Twitter上で問題視された。似たテーマの応募作が多いほど入選が難しくなる、という理屈はもちろんあるのだが、応募者はジェンダーの悩みを入選のためのツールとしてこねくり回しているわけではない。個々の作品それぞれに叫びがあることを忘れてしまつては「咎める人の足元はコンクリート」という構図そのままである。

また、第四十回現代短歌評論賞の募集テーマの一つに「ジェンダーと短歌」が設けられていて、このこと自体は素晴らしいと感じた。ただ、女性一名・男性四名という選考委員自体のジェンダーの偏りが、ジェンダー論を募集する賞の責任を果たす上で万全とは言えないと思う。

一方、ジェンダー観が更新している部分も確実にある。例えば第六十八回角川短歌賞次席の福山ろか「さえずに気づく」は、高校生活の連作で、主体の性別が明確な歌は少ない。

・透明なスूप飲みつづどれくらい頑張るべきか考えていた

福山ろか「さえずに気づく」

少し前ならこの主体や作者が「男子なのか女子なのか」という話は選考の中に出てきそうなものだったが、そういった記述はなかった。主体や作者のジェンダーと、作品の解釈や評価がしつかり切り離されていることは、応募者としても安心できる。

現代詩手帖は昨年ジェンダーとフェミニズムを特集した。短歌研究は来る四月号で歌壇のハラスメントやジェンダーギャップを特集するという。これらの議論は、現状批判によってこそ研がれるということを忘れず、真摯に読まねば、と思う。